



図7 13トレンチ葺石検出状況(北から)

つながる傾斜変換点が確認できなかったことから、その幅を正確に把握できなかった。今回の調査結果からは、現状ではおよそ45m以上の幅をもつと推測され、やはり前方部で確認された平坦面の幅よりも広い。埴輪列はここでも遺存していなかった。

**出土遺物** 円筒埴輪や蓋形埴輪の破片、また少量ではあるが家形埴輪片と思われるものが確認されている。3段目斜面からの出土が多く、後円部頂から転落してきたものと思われる。(遠山・中川)

### 3. くびれ部の調査 第7次

#### (1) 11トレンチ(拡張区)

後円部1段目平坦面と埴輪列の検出を目的として、第4次調査に際してくびれ部に設定した11トレンチを墳丘側へ拡張した。また、第4次調査で検出した埴輪を取り上げるとともに、調査を保留していた「半裁埴輪遺構」と「集石遺構」の再調査をおこなった。

**葺石と埴輪列** トレンチ南西部で1段目斜面を検出した。葺石は転落などで大半が失われていたが、長軸15cm前後の円礫を用いていることを確認した。北東部で検出した2段目斜面では、長軸30cm程度の基底石を長軸が墳丘ラインに沿うように据え、その上に長軸15cm前後の石を小口積み状に葺いている。1段目平坦面の幅は約45mである。トレンチの南壁際と北壁際で、2個体の原位置を保った円筒埴輪を検出した。第4次調査で検出した埴輪と合わせて5個体となる。埴輪列は平坦面のほぼ中央に位置する。前方部の埴輪列を構成する埴輪は確認できなかった。埴輪の間隔は前方部側から10m、12m、18m、15mと一定しない。埴輪はいずれも第1条突帯より上は残存せず、底部のみの出土である。底部径は約30cmをはかる。埴輪ごとに直径40cm前後の平面円形の土坑を掘り、置き土を施した上、その中央に据えている。

**埴輪棺** 「半裁埴輪遺構」と「集石遺構」は埴輪棺であることが判明した。「半裁埴輪遺構」は埴輪列よりも墳丘側に位置し、後円部墳丘ラインに長軸に沿う大小2基の埴輪棺1・2である(図9)。埴輪棺1は検出面で長径1.35m、短径0.8mの楕円形を呈する墓壇に4条突帯5段の円筒埴輪を置いている。墓壇は棺を設置するための掘り込みをもつ2段構造である。棺を安定させるためか、北側に棺に沿って石を置く。東側の小口は石で塞いでいるが、西側は攪乱のため確認できなかった。破碎した円筒埴輪の口縁



図8 11トレンチ土師器皿集積遺構(東から)

部を胴部(第3段)の2個の透し孔を塞ぐように置いている。埴輪棺2は縦に半裁した円筒埴輪を外面上向きに重ねて遺骸を覆う構造である。墓壇は長径0.8m、短径0.4mをはかる。「集石遺構」は埴輪列よりも周壕側に位置し、後円部墳丘ラインに長軸が直交する。集石の下から埴輪棺1・2と様相を異にする埴輪棺3を検出した(図10)。墓壇は長径1.6m、短径0.55m、深さ0.25mの隅丸長方形である。南側では突帯を墓壇の長軸に直交させた埴輪片を、遺骸を覆うように南